馬誌
雜話部
五十八

和書門
類 一七三九五
號 一三〇
函 四
架 六二
冊

武備兵法

内閣文庫
和書
類 一七三九五
號 六二
冊 一五四
函 二
架

内閣文庫
番號	和 17395
冊數	62 (59)
函號	154 455

国立公文書館
National Archives of Japan

馬誌巻之五十八目録

雑話部

日本政府圖書

淺草文庫

馬誌巻之五十八

雑話部

一將たるも卒たるも武士たる人ハ仮初にも曲ある馬をハいとふへからすと誡あるかな

一昔しより馬を上中下に分て用る法あり上馬をハ士是をとりて乗中馬ハ農これを得て田畠をかへす下馬をハ商これを用て賣買を荷ハすとあれハ少しの曲

ある馬ちゝも家来にもし楠正成金剛山の壁書にも馬を撰ふことを記せるもさるるなり　なかり　馬術要覧

一馬ハ跌蹀を芸ふといふ事あり蹴たり踏たりする馬ならてハ用にたゝぬといふ事なり生唼といふ名馬も人喰ふ馬なりさるゆへに宇治川を真一文字に渉りつるなり然るに今の世ハ兎角無難の馬を得んと思ふなり

然るに無難の馬ハなきものゆへ伯樂も僻馬をたゝき直して利を得ることなり伯樂ハたゝ馬を賣ちかりの事なれハ至極尤なる事なれとも買者ハ了簡違ひなり譬へハ智徳ありて僻のなきハ聖人賢人なりまさに生れつきての善人もあれとも多くハ智恵ある者ハ一僻あるもの多けれハ是よりて真の學問をすれハいつしか止てその智恵

のある所以の用に立ものなれハ然るを
僻もなくてたゞ無難なりといふ人ハ白
癡か柔弱か或ハ多病なるか但しハ老
衰の人かそれハのりても益なく無ても
事闕す馬も亦此の如く駻もなく僻も
なく駿足にて無難なるハ世に稀なる
聖賢の人の如しその以下ハ皆一僻あるも
のなりそれを乗直せハ僻たけの用に立
ものなり唯無難なるものをとて撰

へハ伯樂か手にて無理無躰にたゝき直
しけるか又ハ病馬か老馬かし乗つかれたる
馬等の類なり夫等の馬を買求るゆへ
暫くのうちに用に立ぬやうになるも
のなり予か心得ハ僻なき駿足の馬ハ
とても得かたけれハ伯樂のもてあま
したる僻馬をも養ひて用に立や
うに稽古するか肝要なり骨を折て
乗れハ大抵の僻ハ直るものにて予か

試たる事なり假令さつちりと直らす
とも合點して気ハ自由になるものにて
人を使ふも同し事なり馬の僻によりさ
まさまに縄の掛やうもかはりすへて稽古の
心掛にある事にて手綱よしてよく熟せ
ハ手馬に手綱入らすといふ諺のごとく
太槩の僻ハ邪魔にならぬものにて
我物になれハ僻ハ僻なりに気こなさ
ずなりそれゆへ大抵の僻ハ勤て気こ

なすやうにありたき事なり乙丑歳京
師火消詰に僻馬ありて引替になり在
所へ遣りたるときに片山氏の言るにハ
馬ハ一僻あるものなれハこそ古より
稽古といふ事もありつれ僻もなく
無難なれハ稽古ハいらぬものなりと
師家かとありて其道をよく合點し
さる一言なりいかにも稽古さへ熟練す
れハ僻馬も却て用に立ものなり兎角気

尻を達者に稽古を心掛べき事なり足振の
調子などハ馬役の職なれハ強て学ふに及
はぬ事なり唯兎角達者なることを
第一とすべし予が説に従ひ京師火消詰
のかく人にも其馬にて詰らするやうに
なるべし夫よりハ自身より少しもたらき
さへすれハ格別の費へもなく其馬ハ置
る事なりもし平常飲食の欲を止
たらハその費への半分にて馬ハ飼るへ

きるなりまして禄至て薄く厄介多き士
ならハ草さへ自身に刈ときにハ聊費
へもなく草をかりにても馬ハ飼るゝ
ものなるを飼れぬといふハ皆懈怠よ
り起る事なりと思ふへしさて私に
考るに人にハ五常の天性全く具ハれ
とも禽獣ハ偏氣をうけるゆへに五
常の性全く具らすされと馬ハ人に使
ハるへき獣に生れ出て人にハ馴易き

ものなり今試に馬の人を察する
ハ仁なり主人を知るハ義なり足振の
次第あるハ禮なり人の情をよく察し
あてものに列るハ智なり足振を教へ
て忘れさるハ信なりこの五のものあれハ五
常異らすともいひかつ〳〵起伏奔止蹴踏噛
ハ馬の七情なり人の喜怒哀懼愛悪
欲の七情あるか如し然れハその性分に
異りたる七情をさして僻といひ難

くつまるところハ馬ハ生質殊大くして
大拍子のものなれハ唯この七情のうちの
過よる変をさして僻といふなり聖
人ハ七情の發するところ節に中る
かゆへに過る事なくして僻といふ
ものなし凡の人にハ多少とも偏倚
する僻ハ皆あるものゆへに教といふ
事もあるなり天性の名馬ハ七情の
發する所その節に適ふかゆへに過不及

の失ハなけれと丈より次ハ皆偏倚よりる事
のなきハなしさすれハ馬の僻ハ馬の情
と心得いろなる馬にもあるものと思へ
ハ忌嫌ふへき事にハあらす其情の
偏倚なるを察して過不及なきやうに
察し為すか馬術の極意なり然るを察
やうの悪きより却て人か僻を仕付る
やうにするなり人を使ふも惣てこ
の心得なれハとりわけ貴人ハよく

面倒を見て心の寛大なるを人の君たる大徳
とハしらるなり惣して人を使ふにも馬
を察するもたゝ血気に任せて危き事ハ
せぬかよし霊徳院殿ハ其ころ諸侯の中
にても馬術の名誉あらせられ江戸御屋敷
御在所にても厩を建させらるゝにハ必す
御自身にて御世話ありておりくハ下も
御手つからなされ且御召の馬ハ御手飼に
せられたり馬術の道理までもよく御

心得の上と察しけるなり此ゆゑ馬のう
ちに駻馬（あらむま）ありこれハ駒よりハゑこみの馬
にて地道かけ野足だく打交に居らるゝに
自由自在に唯思召まゝになりしハ全
く馬の性情をよく知たまひしなと察
せらるゝなり

卑牧子曰く馬ハもと曠野に生立た
るものなれハこれを使ふにハ必す
彼か受得たる本性に随ひて無理な
る事をせす彼か氣儘をさせぬやうに
ゑこなす事か肝要なり故に易の随
の卦に拘係といふ事を説たるハ深
き道理のある事なりされと同し
畜生の中にても生涯人に使ハるへき
身に定りたるハいかにも憐むへき事
なれハ随分愛して人に仁慈を施か
如くすれハゑより人の情をよく察する
事の妙なる獣ゆへ自然に感通して

吾ゟ自由になるものなり然れハ吾ハ彼
ゟ性質ニ随ひてこれを使ひ彼ハ吾慈愛
に感して随服すよくこの馬を御す
る所の心を推して天下國家を治
めなハ萬民も随服し臣下も忠を致す
へき事なり

さてまた来年より馬飼んと思ハゝ今
年より草を刈ためおかよし大禄大
身の人も予ゟ説を信して行ハんと
ならハ自身に草ハ刈すとも家来ニ刈せ
多分の馬を畜置て不虞の用ニ具ふ
へしまた小禄の士他藩の小臣いかほと
困窮なりとも聊衣食の費へを省
きて一匹の馬をまつ買得たらハ予ゟ
説を用ひて飼つけ乗習ハんことこれ
武士の嗜み國家への忠節なるへし
また左傳に異産ニ乗ことを譏り
たる事見えたり異産とハ他國

出生の馬なり馬も元より同國出生のもの
なれハよくその氣質を知るへき道理なれ
一段と養易きゆへ異産に養ことを
誇るハ尤なる事にて今も厩子を取て駒
より仕立て養たらハ格別ふ養易から
んと思ハるゝなり兵談にも相馬侯
の家士ハ牝馬を養もの多し是古代の遺
風なりといへり
皐牧子曰く牝馬を交へ畜て駒をとら

んことハ天理にもかなひ馬を蕃殖す
るの益大ひなるゆへなれハ是を天下
に通して行ひたき事なりと思
ハるゝなり　厩馬新論

一水戸光圀卿今せの馬好を戒しめら
れし條に世に馬好といふ人を見れハ
まつ丈高くちり遅きか前をとり
あゆみ後足廣くして地道ハうちたみ
ちに躍りをねのり一足に歩みむ

らをつらさゝるやうに気かけ走りなと
ハ殊更よいみて胡暮湯洗ひすそなんと
りてたましき気ずもはつくつをとうた
せ夏ハ蚊屋を釣冬ハ火を以て煖むる
ヌ至るせよしふ百工ゝ商なんといハるゝも
のハさもありなんも士たらんものゝ心す
へき事なり今是をりふまつ丈の
大なるハ気下り自由なさゝるものゝな
りよのつね自由なる馬たりも重き

をつけ長きを帯てハ些不便なるを口付
合人なとも居合せさらんとき急き
気らんよハ心に任せぬ事もありな
ん一度も過ちゝハ大なる不覚
なるへし肉ちく餘りあるハ四足へ
血さかりて遠路に至しかゝす譬へ
ハ人のちりまゝきたるか如し歩む跡ハ
いかめしけれと弦走りおハ些も
とらし前を高くとる馬ハ高つ

まつきをするものなり得足よきと
て踏開きたるハ細道曲のあせ一つ橋なん
と危うしうハ道ハ心地よけれと遠路
なんとすれハ人馬ともよいくく草臥
て乗らぬよハ却て甚りくり馬ハ地道
なりけりなんと殊更に第一なりるを
貴馬の為とて乗らぬ人あり其愛す
る所何のためそや朝夕に湯あらひ
四下をとし毛をやき飼らみするハさる

事なれとも蚊屋を篝火にあふらむるこ
と却て其性を損し事行るときハ用
に立かたし如何んとなれハ馬ハもと
野獣なり水草に生立て寒熱に長
せり大食して華服を着るハ彼か性にあ
らさるを況て蚊屋を篝火にあふらむ
るハ養ふに似て却て害するなり姑
息の愛ハ人のみに限らす又をのれ
乗れハ口あひ悪とて人を雇ひて

のらするハ誠に心得がたし凡馬を御す
るも人を御するも其理ハ同し
気人ハ気合口あひ癖のあるものを
見て或ハ強ニよき地道にあしき
と安く能不能をわきまへ騂不騂を
考へて心に味ひ手ニ熟して自つから
其用をなすへし戦場ニ臨み険阻
を渉り士卒もつらす有力も救
ハす此時ニあたりて生死を一つニ

して難易を共ニするハ馬の外なしさ
れハ人馬一体にして初めて抜群の功
をも立へし士の重んしても重すへき
ハ馬なりさるを観翫のためニ尾を
きり筋をのふる事行り夫馬ハ
重きを負ひ遠きをいたし険阻を
越え深きを渉る力を以て本とす彼筋
をのへ尾をきる馬なんそ是等の
事ニ堪んや生もつかぬかたわとな

す事不仁の甚しきふて人を欺き己
れを徳す誠ニ浅ましきことなり
すや或ハ駒をすくとりて二歳よ
り乗りけし二歳にかれハ老馬の
如く是を乗る筋骨いまた全からす
血氣いまたみちさるニ朝ニ乗りタ
に責るされハいや今代騨の強き
馬ハせニ稀なり夫馬の善悪を論
し骨法を辨するハ馬経安驥相馬

等あり今我なんそこれを贅せん
暫く俗人のためにいたつて心強
く騨なく丈夫なるハ上なり物を見
す落付て藪のうへ平かニして行事疾
きハその次なり丈ハ其主の大小ニよる
へし大やう二寸三寸なりたかるハ甚悪
うしねとも又よき馬ハ雑し養ハ
時々乗かけをし度三度ニ一度ハ
必すかけさらせ常に野足とりて事

を習はすへし第につきて用立事なり或ハ金鼓鉄砲をならしめ或火を見せ水に游かせ或ハ荷を附遠く乗出し或ハ野につなき細道をあゆませ夜ハ折々外に出して雨にぬらし露にも當らすへしさて寒にも熱にも堪てよく其性をとゝめ其用をなすへき事なり

義公随筆

一 蒲生氏郷甚ころの馬醫骨平と申ものに早馬ハ前足のきゝたるゆへか後足のきゝハきゝよきゝゆへかと尋るに後足のきゝハきゝよきゝゆへなりと申す氏郷の曰く我幼少より信長に従ひて弓矢の事よく見聞す軍ハ先手追立られて二の手を以て持返す事ありおくきものなり只先手か第一なりと信長公仰られしか此理を以て考れハ前足のよくきゝたるか

早く候へしと申さるる彼者又云く某
ハ賤き業を仕るゆへ弓矢の道ハ存せ
す生國筑紫の者にて舟の往返を
考へ見るに前櫓より後櫓に鍛
錬の水主をたて舟をおつふ時ハ
舟早く候前より上手を立候ても跡に
よき水主なけれハ舟きかさるもの
なれハ馬も断のかきりと申す是誠に
相馭の備なき故なり

續武家閑談
前橋舊蔵写書

一 馬ハ人の労に換るものなり御ハ六藝
の一なれハ又かたんする所なり武夫ハ
馬に御のる事を務むへきこと肝要とす
元来馬上にて合戦する事ハ胡人の
風中國へ移りぬそれより日本へ
も移るものなり春秋のときまて
ハ車戦なれとも晋呉ら車を毀て
行とすと見ゆ是狄をふせくにこれを用
ゆるハ馬に對せらるる故なり

武門尚故

一軍馬秘用ニ曰く古代ハ小荷駄の如く
なる馬ニ紛る今ハモつやを弄し足
拍子を吟味する事後世武備の衰ふ
る故なり足利のとき大坪式部大夫と
いふ人御ニ長せしあまりニ尾髪を
うるはしくし拍子を吟味するより
馬も勞るし事となれり古代ハ野髪
を用ひといふ證ハ笠掛ニハ鹿子足を
紛るといふ事傳なりとそ鎌倉

の時世ニ大番の勤めあり是ハ諸國ニよ
り内裏の警衛に上る武士とも在郷
より上京するニ野飼の馬ニ騎て京へ
出るニ皆拍子を紛すして馬も息合
を損する事もなきなり是ハ今の
笠掛の鹿子足を常に騎し證なり
唯丈夫をもつて専要とせしかや
流名もなく己ところ得まゝニ騎
たるなるへし

同上

一博労馬といふ事古もありしなり
源平盛衰記巻廿三（源氏清見が関下る條）又云く馬
といへハ博労馬の兎角つくろひ飼た
れハ未出ちかりこそ首をも少し持
挙侍りしらちや気損して物の用
にハ叶ひ難しとあり　貞丈雑記

一古大坪式部大夫庵主愛秀の弟子
馬の口ハ人の面の如くにて
似て似ぬものと心得て兼れ

の歌を聞て只今まてハ馬を気得へ
しと思ひて稽古いたしけれとも稽
古を相止へしといふに愛秀不審に
思ひて今まて精出しける事の如何
やうなる故ニて止へきことハ申されたり
と尋ねられける故ニ幾千万人共限り
なき人の面の如く替りある馬の口
を悉く一生の内ニ兼覚なる事叶ハ
へからすと思ふよりて望みハ絶たる

といふもある心得なりけりなりけりさては
ハあらす三千世界にあらゆる文字の
數限りなき事なり然れども其用
を僅か四十八字のいろはを以て通用候
如くにて馬の口も悉く覚へずとも素
理ある事ぞと申ていよく道に入て
修行仕りけりといふなり右の歌も悟れ
ハ近きなり似て似ぬものとよみて文字
きやうに申けるなれと似よりすし

て似たるものと心得れハ安きなり然し
ながら安きとても右ふたとへさるいろ
はも覚ゆるばかりにて加ち学ひを知
ずしてハ用に立さるもなり當流百弐拾
箇條の中弐拾五箇條まで覚ゆるま
けりふてハ四十八字を覚へ加ち学ひを
知らねと同前にて用に立さる儀な
り工夫して其業を用立るやうに稽古
仕る事第一の儀なりと申されき

安都馬
具佐

文化甲子
昌平坂
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan